

異年齢教育や中高連携で充実を図り 志願倍率も改善させた小規模校のキャリア教育

かけ
— 加計高校 (広島・県立) —

町の存続をかけて、地域ぐるみで魅力化を図る加計高校。
少人数であることを生かした異年齢教育や中高連携を展開するとともに、
小規模校の課題となりがちな視野の狭さへの対策も行っています。その成果は…?

取材・文 / 藤崎雅子

実践のKeyword

🔍 小規模校 🔍 連携型中高一貫校 🔍 全国生徒募集 🔍 異年齢教育 🔍 コミュニケーションプログラム
🔍 総合的な学習の時間 🔍 協調学習 🔍 ボランティア 🔍 コンテスト・イベント応募

高校の魅力化が 町の生き残りにもつながる

豊かな緑に囲まれた山間にある広島県立加計高校は、生徒数100人余りの小さな学校だ。目指すのは「かわいがられ、地域貢献する人材」の育成(図1)。その目標に向けて、部活や学校行事を中心に「人格形成」と、知識と課題発見・解決の両面における「学力向上」の2本柱としたキャリア教育を展開している。

そんな同校には、大きな使命がある。地元である安芸太田町の人口は減少が続いており、現在は7000人弱と県内市町村で最も少ない。高齢化率(65歳以上人口の比率)は県内トップだ。もし同校が廃校になったら、人口流出をさらに加速させてしまうおそれがある。県教委からは、1学年1学級規模の県立高校に対し、2017年度から2年連続で在校生が80人を下回った場合、統廃合などの検討対象とする方針を示されており、同校もその対象だ。校長の小田均先生はこう語る。「長期的に生徒数を確保して学校を存続させるには、教育力を上げて、入りたいと思われる学校となるよう魅力化していく必要があります。目の前の生徒を大きく成長させる教育力が、町の生き残りにもつながると考えています」

対策が急がれる同校は、現在の環境を最大限に活用し、最先端の手法も取り入れながら教育力の向上に努めている。その内容を詳しく見ていこう。

小規模を生かした 学年横断の取り組み

まず、同校の特徴である生徒数の少なさを生かした、ユニークな取り組みに注目したい。

その1つは、春に全校生徒が参加して山口県の青少年自然の家に2泊して行う「集団宿泊研修」だ。研修では、グループで協力して高い壁を越えたり、不安定な板の橋を渡るなどのアクティビティを行う。共に課題をクリアしていくなかで、協調性や信頼感を育むのが狙いだ。これを同校では学年横断のグループ単位で実施する。宿泊の部屋割りも学年混合だ。14年度に初めて実施した際の感想について、教務主任の澤田英徳先生はこう話す。

「実施後、学校の雰囲気がガラッと変わりました。日常的に先輩と後輩が会話する場面が増え、仲間意識が強まったように感じます。学校行事も全校一体となって盛り上がるようになりました」

もう1つ、総合的な学習の時間「探究活動の時間」(以下「探究」)にも、異年齢教育を取り入れている。「探究」とは、主体的・計画的に行動できる人材の育成を目指し、「地域を調べ、触れ、活かす」という趣旨の体験型学習。「森林を考える」「地域観光・伝統音楽」「国際理解」などの6講座があり、すべての講座は地域と連携して行う(図2)。例えば、昨年度の「森林を考える」講座では、森林組



School Data

普通科 / 1922年設立
 / 生徒数104人(男子66人・女子38人)
 進路状況(2016年3月末実績) 大学6人・短大2人
 専門学校7人・就職14人
 広島県山県郡安芸太田町加計3780-1
 TEL 0826-22-0488
 URL <http://www.kake-h.hiroshima-c.ed.jp/>

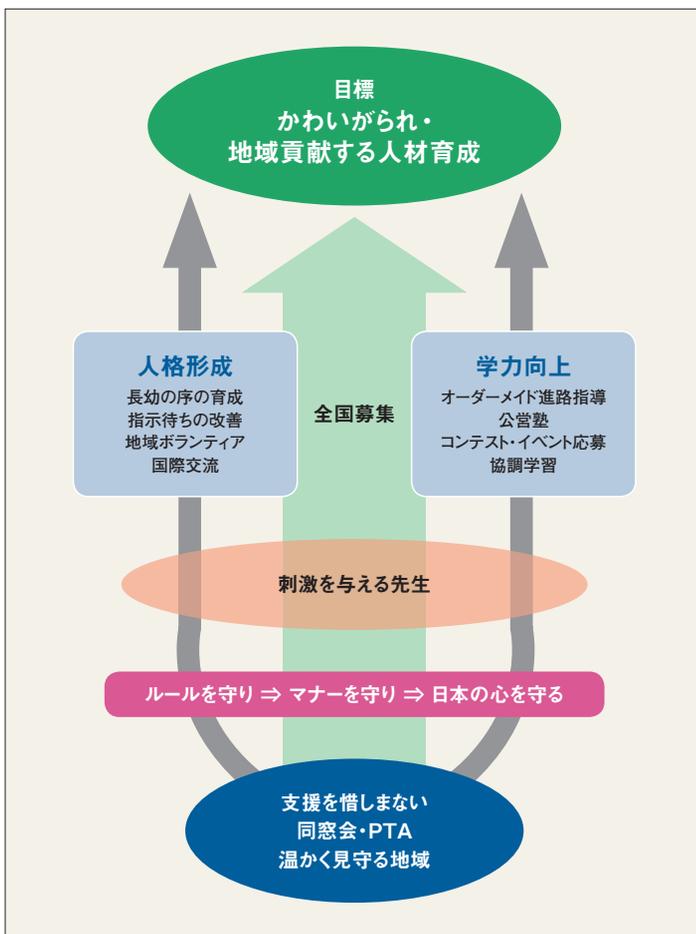


同校の寮や公営塾が入った町の施設

Outline

中山間部にある安芸太田町で唯一の高校で、各学年1クラスの小規模校。生徒数が減少するなか、地域ぐるみで高校の発展のために取り組んでいる。探究活動や協調学習、アドベンチャー教育プログラムなどを次々に導入し、教育の充実を図ってきた。2015年度から全国募集を開始。16年度から近隣の中学校3校と連携型中高一貫校。第9回キャリア教育優良校文部科学大臣表彰(2015年度)。北に約20kmのところと同校芸北分校がある。

図1 加計高校の教育イメージ



● 集団宿泊研修



自然のなかに作られた施設を使って、壁を乗り越えるなどの困難な課題に、グループで協力して取り組む。チームワークによる達成感を味わえる。



「社会に出たら年齢より実力がものをいいますから、3年生だからといってリーダーの役割を与えることはしません。しかし、活動のなかで上級生は自然とリーダーとしての自覚をもつようです」(小田校長)

合の協力を得て、間伐作業現場を見学し、生徒も伐採を体験。間伐材で炭を作り、町内の施設に配布した。

「探究」は1年間、講座ごとの学年横断グループで活動する。教員は各講座に2人入るが、あくまでプロデューサーとして一歩引いて見守る。縦割りグループのなかで上級生はリーダーシップの意識が高まり、学年単位での実施にはない効果があるという。

協調学習を引き継ぐ 連携型中高一貫校へ

学校規模の小ささは必ずしもマイナスではないようだ。今年度、大規模校から異動してきた教頭の工藤宏一先生も、少人数だからこそ育まれた強さを同校生徒に見ている。

「集団が大きくなると、とかく個人が弱くなりがちです。例えば、校歌を歌うとき、クラス単位ならちゃんと声を出すのに、全校でとなると手を抜いてしまう場面は多いものです。しかし、本校ではそんな集団の心理が働きにくく、「一人ひとりの頑張り」が光っているように感じます」

同校には、小・中学校との連続性が強く意識されているという特色もある。町内にある3つの中学校の卒業生の合計は例年30人前後だが、そのうち同校への進学者は5割強。今後は同校進学率を上げてさらに多くの地元の子どもたちを引き受けていく想定で、中学校との連携を強めている。

その代表例は、アクティブラーニング型の授業での連携だ。町教委が主導し、6年前から町立小・中学校では協調学習「知識構成型ジグソー法」を取り入れた授業を行っている。そこで培われた力を高校段階でさらに伸ばすため、同校でも「ジグソー法」を導入。数学から始め、今は様々な教科に広がりつつある。

ある日の3学年の「政治・経済」の授業では、ジグソー法を使って政治参加の

図2 「探究活動の時間」の講座

講座名	内容	連携先
森林を考える	間伐や炭焼きの実践、間伐材活用	太田川森林組合、津浪炭焼き同好会
生活文化研究	藍染、草木染、多色染の実践	染色家
菌類研究	菌床栽培、朽木栽培の実践	広島県緑化センター、きのこアドバイザー
地域観光・伝統音楽	観光調査、水質調査、商品開発	安芸太田町観光協会、太田川河川事務所、地域おこし協力隊
園芸農業	玉ねぎ、サツマイモ、白菜などの栽培	社会福祉協議会
国際理解	姉妹校交流活動	ハワイ、韓国、台湾の高校

●「探究活動の時間」



1月に開催する学習成果の発表会の様子。今後は、いっそう生徒の主体性を重視し、生徒の発案で取り組み内容を変えていく方針だという。

図3 全国規模のコンテスト・イベントへの主な挑戦(2015年度)

コンテスト・イベント	内容
間伐・間伐材利用コンクール	太田川森林組合とのコラボレーションによる活動で、全国間伐ネット会長賞受賞(全国2位)
ビヨンド・トゥモロー ジャパン／東北未来リーダーズサミット2015	全国倍率10倍以上の選考を経て選ばれた約70人のうちの1人として同校生徒が参加
AEON財団 eco-1グランプリ	「探究活動の時間」の地域を調べ、触れ、活かす活動で、中四国ブロック大会出場

●海外交流



昨年度はハワイと韓国の姉妹校および台湾の高校から訪問団が来校。神楽の篠笛演奏や茶道などで交流した。

●協調学習(ジグソー法)



「財政・消費税」「原発・エネルギー」「農業・地方創生」の3分野についてグループで各党について議論。グループを組み替えて、さらに議論を深める。

意識を高める学習を行った。政党名を伏せた前回衆院選のマニフェストをもとに、各党の主張を比較。グループで話し合っ
て理解・思考を深め、実物の投票箱を使
って模擬選挙も行った。
「こうした授業で鍛えられたからか、生
徒は自分の意見を言うことに慣れてい
ると感じます。先生方もそれを生かそう
と自主性を尊重しており、生徒会活動が
活発です。生徒会の発案で、生徒集会の
内容を改善したり、熊本地震を受けて
募金活動を行ったり、様々な動きがあ
ります」(小田校長)

さらに中学校との継続性を強めるた
め、今年度から同校と町内の中学3校は
連携型中高一貫校になった。相互に教員
を派遣して授業を行うほか、合同で行う
学校行事を増やす計画だ。5月に実施
した「集団宿泊研修」にも、今年は連携
中学の3年生が参加。高校生と混合グル
ープで共に活動し、交流を深めた。
「目下の最大の課題は、この中高一貫を
軌道に乗せること。より多くの連携中学
卒業生に選ばれる存在になるよう努め
ていきます」(小田校長)

**学校外との関わりのおかげ
切磋琢磨し視野を広げる**
地域に密着した小規模模校であること
は、良さもある一方で、課題も少なくない。
小学校から同じような顔ぶれのなかで育
ち、「切磋琢磨しにくく」「井の中の蛙」に
陥りやすい」と小田校長。「二人三役で盛
り上げよう」と檄を飛ばすだけでなく、
地域の枠を超えて多くの刺激を与え、モ
チベーションを高めている。
対策の1つとして、公募される多様な
コンテスト・イベントを利用して、全国レベ

ルに挑み力試しすることを奨励。昨年度
は、「探究」の活動でコンクールに出場し
全国2位を獲得したり、全国の高校生が
集まって未来の日本を考えるリーダーシ
ッププログラムに10倍以上の激戦をくぐ
りぬけて参加することができた(図3)。
こうした結果は、当事者はもちろん周囲
の生徒にも勇気を与え、さらに上を目指
す意欲につながっているようだ。
また、生徒確保の狙いで15年度から始
めた全国からの生徒募集にも、多様な生
徒からの刺激による化学反応に期待が
かかる。しかし、町の施設を利用した寮
を用意したにもかかわらず、初年度の県
外受験生はゼロ。アピール不足を痛感し
た同校は学校ホームページを刷新して日
常的に魅力を発信し、町観光協会とも
連携して認知度アップを図った。その結
果、2年目となった今年度は大阪府、島
根県、山口県から3人が入学した。彼ら
の存在が同校にどのような変化をもた
らすか、今後が注目される。
さらに世界にも視野を広げられるよ
う、国際交流にも力を入れている。韓国
の高校に加え、15年度に米国ハワイ州の
高校と姉妹校提携を締結。間もなくそ
れに台湾の高校も加わる予定だ。また、
全校生徒の約1割に相当する9人が、こ
の3年間で米国、韓国、ハンガリーへ4日
間〜1年間の留学をしている。
「これからの社会で生きていくには、多
様性を認め高め合う感覚が欠かせません。
地元の生徒は地元の良いところを認識



教務主任
澤田英徳先生



教頭
工藤宏一先生



校長
小田 均先生

互いに助け合う 学校と地域

このように魅力化が進む同校の教育だが、背景に地域の支援があるからこそ取り組みといえる。20年前、町長をトップとした「加計高校を育てる会」が発足。「生徒の希望する進路の実現」「地域を守る人材の育成」「持続可能な魅力ある学校づくり」という目標を掲げ、加計高校の発展のために支援を行っている。また、学校、町、地域住民が連携して同校活性化を考える「活性化地域協議会」や、町の商工会と連携して小中高のキャリア

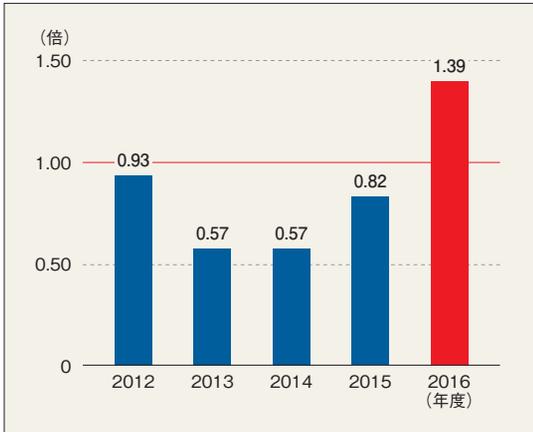
● ボランティア活動



地域の「花いっぱい運動」には、多くの生徒が自主的に参加。毎月、道路清掃活動を行っており、ある月は通学路の交通安全の確保のため、カーブミラーを磨いて回った。

しつつ、他の文化を取り入れ視野を広げてほしいと考えています」(小田校長)

図4 加計高校の選抜Ⅱ(一般入試)の倍率



Interview

生徒と先生の距離の近さが、この学校の魅力

自分が加計高校を選んだ理由は、自分の3人の兄・姉もこの卒業生で身近に感じられたこと、「探究活動の時間」の菌類研究をやってみたかったこと、全国的にも数少ない射撃部があったことなどがあります。入学してみても感じたこの学校の良さは、なんといっても生徒と先生の距離が近いことですね。授業でわからないところを質問すると丁寧に教えてくださいますし、日頃は先生からもコミュニケーションをとってくださるのがありがたいです。



百々哲平くん
(3学年 / 生徒会長)

今、一番力を入れているのは、生徒会としての文化祭準備ですね。自分は2年の2学期から生徒会長を務めています。人前でものを言うのは苦手なのですが、それを克服するためにも立候補しました。実際に役割を担って、この学校の顔なんだ、と自覚して行動するようになったと思います。

将来は旅行関係の仕事に就くことを希望しています。1年生のとき、ハワイに短期留学したのですが、何もわからない自分らをしっかりサポートして下さった旅行会社の方の仕事ぶりに感動したのがきっかけになりました。大学の経済学部観光学科への進学を目指して、放課後補習や公営塾にも参加して頑張っています。

「何もしないで入れる高校」ではない。昨年度、同校の取り組みが新聞やテレビなどで30回報道されたこともあり、教育内容が広く知られるようになったのではないかと、同校は分析する。

ア教育を推進するための「安芸太田町キャリア教育推進協議会」なども、同校教育を支えている。
支援の内容は様々だ。「加計高校を育てる会」の支援の1つには、公営塾の運営がある。元教員を講師に迎え、町の施設を使って土日の朝から夕方まで進路対策講座を開講。希望者は月額2000円で利用できる。同校でも平日は7時間目および放課後を利用した補習体制があり、今年度は学校と公営塾の役割と体制を見直してより効果的な進路支援を行っていく。そのほか、全国的にも数少ない射撃部の機材等の助成や、学校ホームページリニューアルなど同校情報発信の支援なども担う。
ただし、同校と地域は、「学校が地域に助けてもらうだけ」の一方通行の関係ではない。同校の生徒は通学路の清掃活動、

街頭に花のプランターを置く「花いっぱい運動」などのボランティア活動で、積極的に地域に出る。昨年末には同校生徒が「訪問ボランティア隊」を結成し、定期的に一人暮らしの高齢者から依頼を募って窓ふきや電球の交換などを行う活動も始めた。また、マラソン大会やイグルー(雪塊の家づくり)選手権など、地域で開催されるほぼすべてのイベントに同校生徒がスタッフや参加者として関わり、盛り上げに「役買」している。まさに地域と共にある学校だ。
**十数年ぶりに
定員割れから脱す**
同校は十数年間、定員割れが続いていた。しかし、今春の同校一般入試の倍率は1.39倍(図4)。定員を大きく上回る志願者数で、関係者一同を驚かせた。もはや

小田校長はこうした成果を喜びつつ、生徒数確保は決して楽観できる状況ではないため、「期待に応えていくために今後も努力を続けなくてはならない」と気を引き締める。「生徒はまだまだ伸びる余地がある」と工藤教頭。そう信じて、これからも地域と共に、生徒の力を伸ばす体制づくりに取り組んでいくという。